

東大研修を通して

今回の東京研修を通して、人間として成長することができたほかに世の中について知り知識を深めることができた。

企業訪問ではその企業や職業についての知識を得られた。また、自分たちで訪問する企業を決め、自分たちでアポイントメントを取り、自分たちで計画を立て、自分たちだけで企業を訪れるというその行動一つ一つが貴重な経験となった。

東大見学では、自分にとってはまだ高みの花であった東大を見学し、東大生と触れ合い、話し合うことで、東大が自分が思っていたよりも身近でそう遠くない存在であることを感じ、「大学」というものについても詳しく知ることができた。東北大のオープンキャンパスにも行けず、大学について無知であった私に大学の知識を増やしてくれた行事になった。今回はこの2つの大きな経験について話そうと思う。

まずは1日目に行った企業訪問だ。私たち27班は横浜にある京セラ横浜研究所を訪れることにした。そこでは事業についての質問もしたが主に研究者という職業についての質問をした。京セラの建物は私が思っていたよりもはるかにでかくガラス張りで立派だった。私の班は男子2人だったが総務の方と研究者の方が対応してくださった。最初は緊張して、うまく反応したり質問することができなかったが、京セラの方が気さくに話してくださり、話を広げてくださったおかげで会話をスムーズに行うことができた。最初に京セラの事業についての説明があった。

質問では、「この会社についたからこそ言える、学生の時やっておけばよかったと後悔したこと、やっけてよかったと思えることはなんですか？」という質問に対し、研究者の佐竹さんは、「目標を立てること」とおっしゃっていた。企業では売り上げが大切で、その売り上げをいつまでにどのくらいがいいかということを考え、そのために、日程を正しく守ってやるのが大切だとおっしゃっていました。また、細かく目標を区切ることで、その目標が実現しやすくなるからおっしゃっていた。これからは、勉強において「〇〇大学現役合格」という大きな目標に向かって「次のテストで苦手科目で平均点以上の点数を取る」と言った目の前の目標を設定して、日々勉強に励んで行きたいと思う。

「この仕事に就いて辛かったこと、悔しかったことはなんですか？また、その辛かったこと、悔しかったことからどのようにして立ち直りましたか？」という質問に対し、研究者の佐竹さんは「開発が佳境になりスケジュールが遅れると、体力・精神的にも辛くなる。それが過ぎれば明るい未来が待っているのをそれを目指して頑張る。」とおっしゃっていた。

「私たちは将来研究職に就きたいと考えているのですが、これからこの京セラ横浜研究所

へ新しく就職してくる人たちに望む、志はなんですか？」という質問に対し、研究職の佐竹さんと総務の山口さんは、「イノベーションができる人」と答えました。イノベーションとは、技術革新のことであり、イノベーションができる人とはつまり新しいものを開発できる人のことである。イノベーションは企業の成長であり、40歳を超えると発想力の衰えなどにより難しくなるため、イノベーションを起こせる若者を望む。」とおっしゃっていた。

また、「こちらの研究所では、車載カメラやスマートフォンを作られていますが、クレームや苦情はあるのでしょうか？」あるとしたら、それらをどのようにして商品の開発につなげているのでしょうか？」質問に対して、「苦情やクレームはくる。きたら、その根本となっている原因を考え、それを踏まえて、暫定対策というものをする。暫定対策とは正式に対策を施すまでの間の臨時的対策のことである。大切なことはそのクレームや苦情と真摯に向き合うこと。改善することで技術の進歩にもつながる。1つクレームは商品の良化につながる。」とおっしゃっていた。また、開発過程においては、本質安全と機能安全がある。本質安全とは、そもそもを安全にすることであり、機能安全とは、施して安全にすることも。本質安全をどこまでできるかで、商品の安全性も大きく変わってくる、とおっしゃっていた。

他に、環境への配慮のことを尋ねると、「身近なことと言えば、ゴミの分別が細かく、20種類程ある。ゴミの分別が細かければ、リサイクルしやすくなり、環境にもいい。また、京セラの売買取扱では、有害物質を一切使っていない、環境への負荷を軽減している。開発面では、リチウムイオン電池など、環境にやさしい商品の開発にも努めている。社内では電機、ガスなどの使用量を制限したり、車がほとんどプリウスであったりと、小さなことから省エネを意識している。環境に対してやさしい企業でありたい。社員もそれを意識してやっています。」とおっしゃっていた。

いまの仕事のやりがいについて、研究者の佐竹さんは、「自分が開発した商品が実際に家にあるのを見ると嬉しい。」とおっしゃっていた。また、総務の山口さんは、「前は営業をやっていたこともあった。営業では、ものを売る仕事をしていて、打ったパーツが製品となり世の中に送り出されていき、消費者に喜んでもらえることが楽しかった。また、いまは、いろいろな部分で縁の下の力持ちの働きをし、社員の働きやすい環境を提供し、社員に喜んでもらえたり、社員が結果を残したりすると嬉しい。」とおっしゃっていた。

最後に京セラでは、経歴が良いからできる、とかそういうわけではなく「実力主義」である。自分だけでできるものではないものはチームで。互いのことを思いながらやっていく。自分だけのためではなくみんなのために。自分のことだけだと周りも助けてくれなくなる。周りに支えられながらやっていく。ということを感じた。「渦の中心になって」という言葉があり、周りとともに支え支えられてやっていくことが大切ということをお話しいただいた。

この企業訪問を通してこれからの自分の進路についての見通しが立ったほか、勉強への意

識や、これからの商品の見方が変わってくると思う。

次に東大見学について話す。硬式野球部の夏の大会と東北大のオープンキャンパスが重なり東北大のオープンキャンパスに行けなかったため、私にとっては、「大学」というものについて説明を受けたりする初めての機会となった。今回は午後に見学した、東京大学本郷キャンパスの農学部について話そうと思う。

私はまだ大学の学部についての知識がなく、「農学部」というと、農業について日々学んで米の品種改良に精を出す学部なのかなと思っていた。しかし、実際の農学部は私が思っていたのとは全然違った。東京大学の農学部には14の学部があり、その中には、獣医学や生命化学・工学などがあり、私が想像していたよりもはるかに素晴らしいものだった。その中でも私は水産化学研究所と動物細胞制御学研究所を見学した。水産化学研究所では、いろいろな研究を行っていた。「魚を美味しくする」、「脂質に味はあるのか」などといった、様々なユニークな研究が行われていた。それらをの1つ1つはとても興味深いものであった。

次に見学した動物細胞制御学研究所では、『ヒトで「クワシオルコル」と呼ばれる栄養失調の発生機構は、線虫から哺乳類に至る動物で保存されていて、これを利用することにより、私たちは、サカナ、トリ、ブタなどのいろいろな臓器への脂肪蓄積量を調整し、これらが高品質食資源になることを見出した』ということを知った。

ほかにも東京大学の外観が素晴らしかったり、実験の機器がとても高価で驚いた。また、東大生の話を聞いたり進路について一緒になって本気で考えることで、大学選択について自分と向き合い、真剣に考えることができた。私はまだ大学について無知なので、これからは大学の説明会やインターネットを利用して、まず大学について「知る」ことから始めていきたい。

今回の東京研修を通して、世の中について知り、自分ともう一度向き合い、自分の将来について真剣に考えることができた。この東京研修ができたのも先生方、保護者、東大生、京セラの山口さん、佐竹さんなどたくさんの方の支えがあつてのことなんで、自分のためだけでなく、その方々のためにもこの東大研修で得たことを踏まえ、これからの未来をより良い、有意義なものにしたい。